

### 3 指標と目標

#### (1) 目標の考え方

現在予測される 2030 年の滋賀の社会・経済の姿は、人口は 2015 年を前後をピークに減少に転じ、2030 年にはおよそ 136 万 8 千人になると予想されている。また、滋賀県の一人あたり GDP は 0.90% の年平均成長率を想定している。

こうした、社会経済の成長を元に、持続可能な社会を考えると、地球温暖化問題への対応する「低炭素社会」に向けた取組や、資源の採取・利用・廃棄の視点から、これまでの大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会経済システムを環境への負荷を出来る限り少なくする社会経済システムとしての「循環型社会」、さらに、生態系の保全の視点から「自然共生社会」に向けた取組が必要となる。

こうしたことを踏まえ、持続可能な社会へのシナリオを構築するためには、2030 年の滋賀で達成されているべきあるべき社会像を提示した上で、めざすべき環境の状態を明確に設定する必要がある。

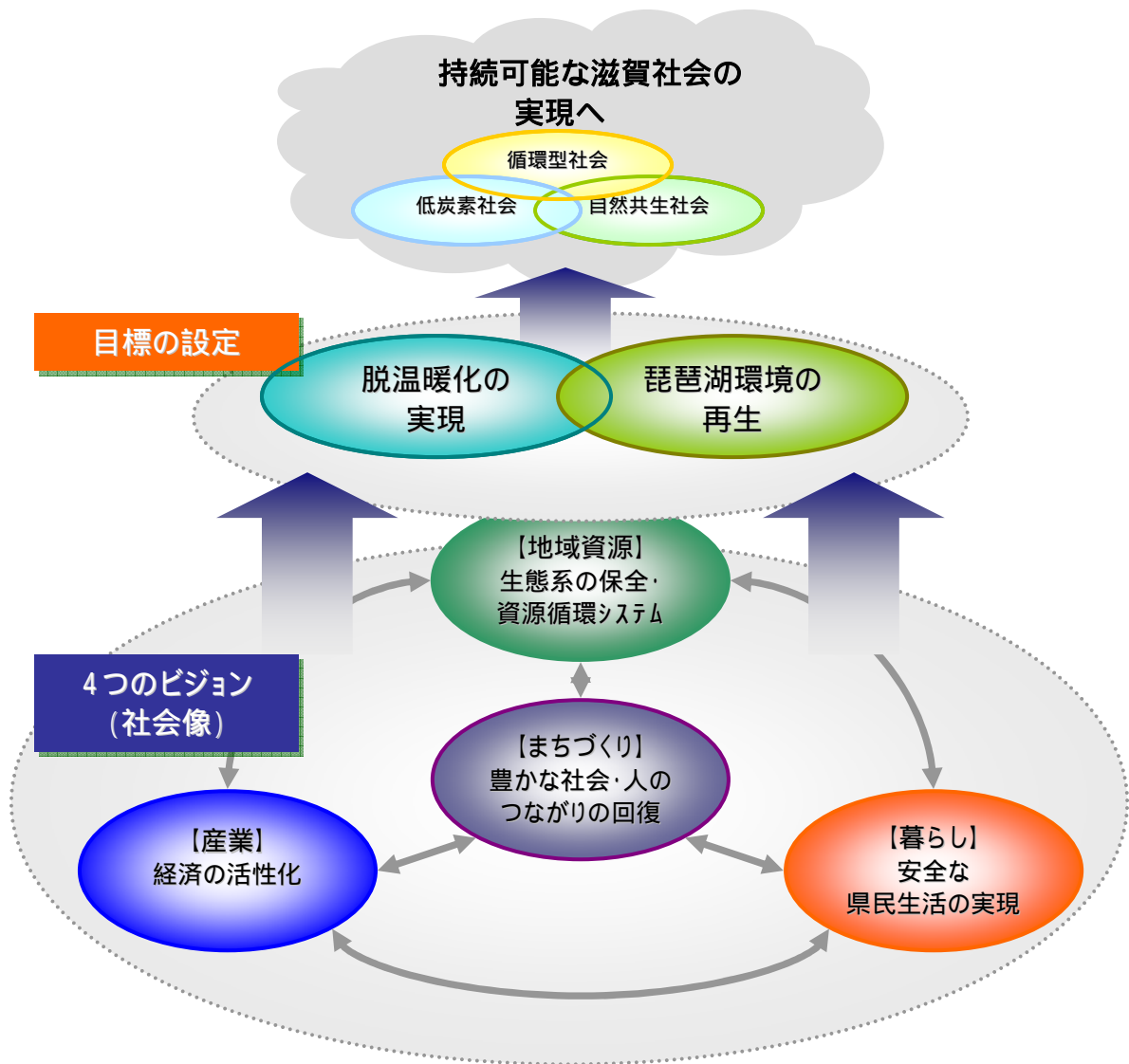
環境の状況を示す指標には様々なものが考えられるが、ここでは、「脱温暖化の実現」「琵琶湖環境の再生」の 2 つを目標として掲げる。このうち、前者については、温室効果ガス排出量を指標として扱い、定量的な数値目標を設定することとする。後者については、琵琶湖の水質・生態系の保全が進み、人々の暮らしと琵琶湖の関わりを深まっている状態をとらえ、定性的な目標として設定する。

また、めざすべき社会像として、4 つのグループ（まちづくり、地域環境、暮らし、産業）を設定し、それらの社会像が実現されているかどうかを上記の目標でとらえ、その程度を把握するものとする。

---

<sup>1</sup> めざすべき社会像については、2 章にて詳細を記述。

図表 持続可能な滋賀社会の実現へのイメージ



## (2) 目標の設定

本構想は 1990 年を基準年として、2030 年を目標年度とする。

## (3) 目標

### 脱温暖化の実現

IPCC 第 4 次評価報告書によると、1906 年から 2005 年までの過去 100 年の間に地球の平均気温は約 0.74 上昇、最近 50 年間の長期傾向は、過去 100 年のほぼ 2

倍となっている。また、CO<sub>2</sub>濃度は過去100年間で約1.4倍となっている。

地球の平均気温の上昇が2～3以上である場合は、全ての地域において自然環境等から受ける恩恵が減少するか損失が増加すると報告されている。

IPCC第4次評価報告書によると、気温上昇を2.0～2.4に抑えるためには、2050年におけるCO<sub>2</sub>排出量を2000年比50%～85%の削減が示唆されている。

また、国立環境研究所の脱温暖化2050プロジェクトの報告によると、2050年までに世界の温室効果ガス排出量を1990年比約50%削減する必要に迫られる可能性があり、先進国である日本はそれ以上、たとえば60～80%削減を求められることが示唆されている。

このため、日本の一地域である滋賀県においても、同様の排出削減が求められる。そこで、こうした状況を考慮し、目標値<sup>2</sup>の設定を以下のとおりとする。

2030年における滋賀県の温室効果ガス排出量を

**50%**削減(1990年比)する

気候の安定化には数十年～数百年の時間と、世界的な取り組みを必要とするが、2030年に滋賀県が脱温暖化社会を実現することは、国内外に向けてその取組姿勢を示し、生存可能な地球環境を将来世代に残すために必要なことである。

さらに、「脱温暖化社会」を実現することにより琵琶湖の生態系の保全など「琵琶湖環境の再生」にもつながることとなる。

### 琵琶湖環境の再生

琵琶湖は、滋賀県をはじめ近隣府県にとって貴重な水資源であるとともに、生態系、漁業、観光、景観、文化芸術など多様な価値を持つ自然の宝庫であり、滋賀県の持続可能な社会の実現のためには、琵琶湖環境が再生が重要な要素となる。

これまで、琵琶湖環境については、有害物質による汚染防止や赤潮やアオコという直面する水質悪化に伴う現象に対応するため、水質保全対策を進めてきた。

しかし、現在では琵琶湖の生態系、琵琶湖に棲んでいる様々な生き物たちにも注視すべき状況となってきた。

なかなか改善しない水質問題も今後は、水質が微妙な生態系のバランスの基に形

<sup>2</sup> 滋賀県の温室効果ガス(二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)、メタン(CH<sub>4</sub>)、一酸化二窒素(N<sub>2</sub>O)、ハイドロフルオロカーボン(HFC)、パーフルオロカーボン(PFC)、六フッ化硫黄(SF<sub>6</sub>))の排出量の大半はエネルギー起源のCO<sub>2</sub>である。今回、本構想で対象とする温室効果ガスは とする。

成されているとの概念を入れて解決を考えて行く必要がある。

したがって、今後、目指すべきは、水質保全と共に、プランクトン、小型魚、大型魚、貝類などからなる琵琶湖全体の生物多様性の確保であり、様々な琵琶湖在来の生き物がにぎわう琵琶湖の再生であると考える。

また、人の暮らしと琵琶湖の関わりを考えた時、人々は昔ほど琵琶湖を身近に感じなくなってきていると考えられ、琵琶湖を近く感じ、琵琶湖とその流域に対する思いを豊かにしていく必要があると考える。

人がもっと琵琶湖で遊べる、琵琶湖の恵みを味わえる、琵琶湖のある滋賀で住む人たちが誇りを持てる、愛着をもてる、すなわち、私たちの遊・食・住がもっと琵琶湖とつながっている状態を目指す必要がある。

こうした琵琶湖の賢明な利用をとおして、県民生活の質の向上がはかれるものと考えられ、目標設定を以下のとおりとする。

琵琶湖流域および周辺で生物多様性に富み、健全な生態系が成立し安心・安全な琵琶湖水環境が成立している。  
遊・食・住などの人の暮らしと琵琶湖の関わりが再生している。